

## 2023年度 指定校推薦 小論文問題

次の文章を読み、問いに答えなさい。

わーど・いんぐりっす

### 1 誰もが英語を学ぶ理由

どうして全員が英語を勉強せねばならぬのか。それは今や英語が国際共通語だからである。この表現は甚だ気に入らないが、現実として受け入れざるを得ない。人間の交流が盛んになれば、なんらかの言語に共通語の役割を担ってもらわなければならない。それが現在では英語であるというだけの話である。

そういう便宜的な共通語としての英語である。となればその目指すところも、他の言語学習とは自ずから違ってくる。何が違うか。それは特定地域の文化と結びついていない、いや、結びつけたくない英語を、世界中が勉強したことである。これが World English へと繋がっていく。

たとえばロシア語を勉強するときには、文字や語彙だけでなく、ロシアの文化に関する知識も増えていくだろう。だが、英語は違う。英語の学習では偏った地域の文化に触れるべきではない。なぜなら英語は国際共通語だからであり、だからこそ世界でこれほどまで多くの人々が学んでいるのである。全員がアメリカやイギリスの文化に憧れているわけではないし、これを学ぶ必要もない。つまり World English を学ぶべきなのだ。少なくとも自分でクラスを選ばない教養英語の授業で、一部の英語圏文化を押しつけるのは間違っている。

### 2 英語の失ったもの

これは外国語としての英語が失った、もっとも大きなものである。不動の地位と人気を確立した代わりに、地域文化を捨てざるを得なかった。これがいいか悪いかは分からない。ただ、アメリカ文学やイギリス詩が好きで勉強してきた英語教師にとっては、嬉しくない話だろう。

それに語学の学習で文化がないというのは、なんとも潤いが無い。今までいろいろな外国語を学んできたが、わたしはその言語が使用されている地域の話がいつも楽しかった。イタリア語の先生は故郷のフィレンツェの話をよくしてくれた。チェコ語を学びながらビールがますます好きになった。なのにそういう楽しみが英語にはない。

そこでもう一度考えてみた。英米文化を排除しようとするからつまらなくなるのだ。そうではなくて、いろんな地域の文化、いや、いっそのこと、世界の文化に触れればいいのか。何と言っても、英語は世界共通語なんだから。さりとて、世界中の話題に触れるには、時間もなし、こちらの知識も追いつかない。それにやはりメインは言語学習であることも忘れてはならない。

### 3 World English は複数である

そこでわたしの授業では、欲張って世界のいろいろな英語に触れることにした。気に入って使っている教科書は Judy Yoneoka, Jun Arimoto, *Englishes of the World* (三修社、2000年)。これは韓国人やドイツ人、タンザニア人やペルー人など、いろいろな言語的背景を持つ人たちの話す英語を紹介する音声教材である。著者は日本に滞在中の外国人にまず簡単な自己紹介をしてもらい、さらにインタビューをする。もちろん全部英語であり、これを聴き取っていく。その英語はそれぞれ違っていて、とても魅力的だ。ある人は r の音が全部巻き舌になっている。別の人は h の音が脱落する。それから独特なイントネーション。こういうヴァリエーションに富んだ World English に、学生といっしょに耳を傾ける。

さらに、教材の中にはインタビューの一部からの書き取り問題がある。これはもう本当にわけが分からない。どう考えてもそんなことは聞いてないだろう、というのが答えだったりする。しかも録音状態があまりよくなくて、雑音も多い。だからできなくて当たり前。この気軽さが却っていいのか、学生たちは楽しそうに書き取る。ときどき、ある国の英語が天才的に聴き取れる学生が現れて授業が盛り上がる。わたしも含めて、誰が聴いても「ワンターン」としか聴こえないのに、ちゃんと One time だと理解したりする。そういう能力だって評価していい。だいたい、将来英語を使ってコミュニケーションする相手は、英語のネイティブに限らないのだから。

さらに面白いことに、このような英語に慣れてくると、標準発音が聴き取りやすく感じるらしい。TOEIC のリスニング問題の発音にホッとする学生さえいる。いろいろな発音は認めるべきだけれど、学習するときにはやはり標準を目指したほうがいいのかという不思議な結論になる。

また癖の強い英語でまくし立てられると、聴くほうはやっぱりつらい。ということは、わたしたちが英語を話すときは、ゆっくり話したほうがいいのかという気になる。

ということで、世界の英語を少しだけ体験しながら、どんな英語を目指したらいいのかを考えるのが、わたしの授業なのである。外国語として英語を習った者同士が、お互いにちょっぴりずれた発音と文法でやりとりする。これが World English だ。

このような教材を使うことに抵抗を感じる人もいよう。教室で教えるのに、いわゆる標準でない英語を教えているのか。調音がずれているばかりでなく、文法だって怪しい。冠詞どころか、時制も数も、いろいろとおかしい。教科書ではカッコなどを使って多少の訂正をしているが、音声教材は訂正のしようがないので、テープからは凄まじい英語が流れる。このまま学生が間違っただけで覚えたしまったらどうしようと心配になる。

でも、それが英語の現状なのではないか。世界中でみんなが英語を使っている。その分、発音や文法が標準と比べてずれていることがあっても仕方がない。そこはお互いに妥協する。

英語が国際共通語であるというのなら、標準語に近い発音や語法をありがたがるのはおかしい。現在の英語はこの点がまだまだで、一部の英語だけがステータスを持っている。この状態が続くのだとしたら、単なる英語独裁体制である。これではいつまでたっても World English は二流品扱い。さて、将来はどうなるのか。

そうそう、先ほどの教材の優れているところは、英語を Englishes と複数で捉えている点である。これからの英語はさらにヴァリエーションが増えて、もはや一つの言語とは捉えにくくなるかもしれない。それでも英語には違いない。何やら得体の知れない面白そうな言語が生まれそうだ。

出典：黒田龍之助『ポケットに外国語を』、ちくま文庫、2013年。出題のため一部変更。

問1 本文を要約しなさい。(300字以内)

問2 英語やその他の外国語を学ぶ際には、どのように学ぶのが良いのでしょうか。思うところを述べなさい。(500字以内)

以上